

後期水戸学形成における立原翠軒論考

武石智典

－はじめに

後期水戸学は、水戸藩で生まれた学問で、学問的性格は当時の水戸藩が抱えた諸問題を解決し、ひいては幕藩体制が構造的に抱える問題の解決を目指すという経世論の性格を有していた。

他方、後期水戸学は、その学問的性格から、『大日本史』編纂を中心とした学問である前期水戸学とを分けられる。後期水戸学について本山幸彦氏は「後期水戸学が幽谷門流の学であったとすれば、それは主として政経の学であり、同時にその政経の実践を担う人間を形成する学問」(1)であり、「水戸藩では文化・文政年間(1804—29)の彰考館総裁であった藤田幽谷、およびその一門の学問とみなされていた」(2)としている。つまり、後期水戸学とは、水戸藩の史館である彰考館の総裁であった藤田幽谷、並びにその門弟たちによる経世の学であり、政治の実践の教育を目指したとの理解である。本山幸彦氏に限らず、従来の研究において後期水戸学とは幽谷にはじまり、弟子である會澤正志齋、幽谷の子、藤田東湖によって形成されたとされる(3)。ゆえに、後期水戸学研究の中心は幽谷、正志齋、東湖で、加えて彼等の門弟たちである。

ただ本稿で主題とする立原翠軒については後期水戸学者と分類されることは少ない。これまでの研究で翠軒が論及されるのは、遅滞していた『大日本史』編纂作業を再び軌道に乗せた点や、弟子の幽谷と『大日本史』編纂において対立し、それが後に、党派争いにつながった点等が中心であった。しかしながら翠軒の学問や後期水戸学の形成に果たした役割についての研究は十分に行われているとは言えない。

ここで翠軒に着目するのは、彼が幽谷の師であり、取り立て彰考館に入れ

たという二人の関係性のみならず、田中江南らから古学を学び、史館への本格的な伝播を行ったことなどの問題についてである(4)。

また、翠軒は積極的に藩政に参画しており、時に幕政に関する意見をも藩主を通じて上書している。加えて水戸藩の蝦夷地測量については自身が企画し中心的役割を果たした(5)。後期水戸学を当時の水戸藩内外の問題を解決するための経世論であり、政治の実際の担い手の育成と位置づけた場合に、翠軒の学問的性向が具体的事績に反映していることを無視することはできない。

本稿は、幽谷との断絶ゆえに、従前の後期水戸学研究において顧みられることの少なかった翠軒について、その学問から、後期水戸学において果たした役割を問い直すものである。その際に、翠軒の学問と断絶した弟子であり後期水戸学の端緒とされる幽谷の学問にも配視しつつ、彼等師弟以降の後期水戸学への継承と断絶について考察する。その上で、後期水戸学の形成の端緒を明らかにし、翠軒の事績の再評価を試みるものである。

二 翠軒の学問と志向

立原翠軒(1744—1823)、翠軒は号、水戸藩を致仕したのちに用いたもので、他に此君堂、東里がある。字は伯時、名は萬。延享元年(1744)に水戸藩士、彰考館文庫役の蘭溪のもとに生まれる。翠軒の師としては、谷田部東壑(6)、田中江南(7)、大内熊耳(8)、細井平洲(9)がいる。翠軒は宝暦13年(1763)に書写場傭として彰考館に入り、後に総裁となるのは、天明6年(1786)である。就任してから致仕を命じられる享和三年(1803)まで総裁であった。

翠軒の学問を考える上で、重要なのが、総裁になるまでの長期間、彰考館で用いられなかった点である。その不遇な時期について次のように述べている。「近来此間學術大誤、忌才妬能。総裁之事業、編志修文、東之高閣、国史

之館、有名無実。近来此の間の學術大に誤まり、才を忌み能を妬む。總裁の事業、編志修文、之を高閣に束ね、国史の館、名ありて実なきなり。」(答菊池平八)、つまり、彰考館の状況について、館員が才能のある者を妬み、總裁にしても編纂事業を進めず、史館とは名ばかりであると批判している。翠軒のこのような批判は、遅々として進まない『大日本史』編纂作業をよしとする總裁の名越南溪はじめとする館員の非を責めるものであった。翠軒が置かれた立場がより如実に表れているのが、以下である。

性之近僻、好涉獵、惡固陋。而有人乎公側、以僕為攻異端之學、党同代異(10)、引繩排根(11)、誇誹程朱、廢棄道德、大戾西山先公興學之意。嘗受名越子諱惡、且蒙富田子教誨、僕戰栗恐懼無知自措也。

(与鈴木總裁書)

性の僻に近きは、涉獵を好み、固陋を悪む。而して人の公側にあり、僕を以て異端の学を攻め、同じきに党がり異を代ち、繩を引きて根を排き、程朱を誇誹し、道德を廢棄し、大いに西山先公興学の意に戻るとなす。嘗て名越子の諱惡を受け、且つ富田子の教誨を蒙る。僕、戰栗恐懼、自ら措くを知るなきなり。

翠軒は自らの性向を遍く涉獵し、一事に拘ることを好まないとしている。他方、徒党を組み、異端の学である古学を修め、朱子学を誹り道德を廢し、二代藩主徳川光圀の『大日本史』編纂の意向と大いに異なると非難されていると述べる。その上で、彰考館の總裁である、名越南溪、富田中洲から厭われ叱責を受けたとする。翠軒は自己を徂徠学者とし異端とされ非難されることに対して次のように述べている。

夫齟齬家皮相、不問僕之意如何。以僕之好博覽、旁及仁齋徂徠諸家之書謂、是彼、非此務立門戶、陷流俗浮靡之風矣。是固非弁說之所能解者、有大似列子竊鈇之喻(12)、心既以僕為異端之徒、其言其色無視非異端。

(同上)

夫れ齟齬家の皮相、僕の意如何なるかを問はず。僕の博覧を好み、旁らに仁齋徂徠の諸家の書に及ぶを以て謂へらく、是れ彼、此れ務めて門戸を立つるにあらずとも、流俗浮靡の風に陥る。是れ固より弁説の能く解く所の者にあらず。大いに列子竊鉄の喩に似たるあり。心に既に僕を以て異端の徒とし、其の言、其の色、異端にあらざるを視るなしと為す。

翠軒は、伊藤仁齋や荻生徂徠をはじめとした朱子学者以外の書物を身近に置くのは、博覧を好むのみである。このことから彼を異端とする者は、その学問が仁齋・徂徠の学問を信奉し、朱子学を蔑ろにしていると批判する。翠軒は自分を妬み、異端とみなすものは、彼の行動すべてが異端にみえるため、いかようにもその誤解を解くことはできないとしている。

ここで着目すべき点は、翠軒があくまでも仁齋や徂徠といった学者の書物を身近に置くことに関して博覧の一語で片付けていることである。異端とされる理由である古学を学ぶことに関して、終始、博覧や涉獵という学問的関心に過ぎないとしている。

翠軒はこれらの学問としての有用性といったことを述べない。その学問遍歴から考えた場合、仁齋・徂徠の影響を受けたことは否めない。にもかかわらず、翠軒は、博覧・涉獵とし、古学を異端とすることに一切反論をしていない。

このことは、翠軒が総裁になるまでの彰考館での朱子学以外の学問の置かれた状況を示すもので、また、あくまでも彼にとって古学は、学問の一つに過ぎなかったことを表わしている。

では、翠軒は、朱子学、古学をどのように自己の学問の中で位置付けたのか。

雖然古言之不明、深義之難曉、須有注解。故漢有伝注、唐有疏。至宋朱子出、解經不襲前人軌述、自發揮新義。爾後注家無慮數十百、愈多愈異。近有伊維禎物茂卿之徒。身生千載之後、萬里之外。其学多信漢儒之說、最責宋学之非。自謂之古学、二家又各異焉。然至共排宋儒則一而已。遊

其門者勸説雷同(13)、殆風靡天下。(擬策問二道)

然りといえども、古言の明らかならず、深義の暁り難ければ、須らく注解あり。故に漢に、伝注あり、唐に、疏あり。宋の朱子の出るに至り、経を解するに前人の軌述を襲がず、自ら新義を發揮す。爾る後に注家、無慮数十百、愈多く愈異る。近きは伊維禎、物茂卿の徒あり。身は千載の後、萬里の外に生まる。其の学、多く漢儒の説を信じ、最も宋学の非を責む。自ら之を古学と謂ふも、二家又た各異れり。然れども共に宋儒を排するに至るは則ち一なるのみ。其の門に遊ぶ者、勸説雷同し、殆ど天下を風靡す。

翠軒は、経書を解釈する上で、注釈は欠かせないもので漢代の注、唐代の疏があった。しかし朱子は、従来の注釈を踏まえ、新たな注釈を作ったとする。その上で、注釈が増え、中でも、仁齋、徂徠がこの朱子の解釈に批判的な立場から新たに註を加えている。彼等の学問姿勢はそれぞれ異なるが、朱子学を非難することは共通している。その門下に学ぶ者は、定見を持たず従い、結果、多くの者は学説に影響を受けた。

古文辞学が世の中を席卷した要因を、門下の者が付和雷同したに過ぎないとする。だが、この学問について、「読其業、蔚其文、卓其義可言勤矣。(其の業を読み、其の文を蔚み、其の義卓きは、勤と言ふべし。)」(同上)とし、篤厚であると評価する。

対して朱子学は、「雖然朱子之学日月明於世久矣、似不可以廢焉者。(然りと雖も朱子の学、日月、世に明らかなること久し。以て廢すべからざるものに似たり。)」(同上)、世の中で認められて長く、廢するべきではないとしている。

翠軒の学問の位置づけとして、朱子学は既に長い間、世の中で認められてきた学問であるから廢すべきではないという消極的容認である。一方、古学に対しては、篤厚という言葉で高く評価している。この点から学問として考

えた場合、朱子学よりも、仁齋学、徂徠学に重きを置いていたことは明らかである。

ただここで重要なのは、仁齋学と徂徠学を古学として一様に捉え等置している点である。仮に翠軒を古文辞学派に属す学者とするならば、仁齋学と徂徠学を同じく古学と位置づけたであろうか。徂徠からした場合、仁齋は批判対象であった。このことから容易に翠軒を徂徠学派の儒者とすることはできないことは判然とする。

では翠軒は具体的に自己の学問をいかに位置づけたのか。当時の彰考館は名越南溪に代表されるような朱子学が主流であり、学統からした場合、翠軒は徂徠学派に位置づけられなくもない。ただ先に述べた通り、朱子学より仁齋学・徂徠学を重んじはするものの、古学の絶対化や、朱子学の批判は行っていない。そのことが明らかなのが次の文である。

蓋僕之務学、勿論修身齊家也。即有所私願者、非徒然也。故謝世事、絶外交、凡劍槍武技、所始学者一切棄去。以為業不專、則学不精。志不壹、則事不成。六經諸史、吾師也。学豈有流派哉。解經者漢伝、唐疏、宋註何扱。其說之有異同得失者、各有所見而然。何必勸説雷同是彼。非此屑々事論弁。不窮淵源、焉見崑崙、故読書、自古書始、參以諸家之說、集而蓄之、博文約礼。竣有成立之時、至近世諸書、隨得隨読他山之石以攻玉、涅而不淄何害於己。(与鈴木総裁書)

蓋し僕の学を務むるは、勿論、修身齊家なり。即ち私に願ふ所の者あり、徒然にあらざるなり。故に世事を謝し、外交を絶ち、凡そ劍槍武技は、学を始むる者の一切棄て去る所なり。以為らく業専らならざれば、則ち学精ならず。志壹ならざれば、則ち事成らず。六經諸史は、吾が師なり。学豈に流派あらんや。經を解する者、漢伝、唐疏、宋註何ぞ扱ばん。其の説の異同得失有る者は、各見るところありて然り。何ぞ必ずしも説を勸め是れと彼とに雷同せん。此の屑々たる事論の弁にあらず。淵源を窮

めずして、焉んぞ崑崙を見む。故に読書は、古書より始め、参するに諸家の説を以て、集めて之を蓄へ、博文約礼す。成立の時あるを竣て、近世の諸書に至り、得るに随ひ読むに随つて、他山の石の以て玉を攻くべく、涅すれども淄せざれば、何ぞ己を害せん。

翠軒自身は自らが学ぶ目的を「修身齊家」にあるとし、その上で「六経諸史」を師とし、学問には学派はないと唱える。なぜならば、各々学派には長短得失があり、それぞれに用いるべき優れた箇所がある。読書は、古い時代のものからはじめ近い時代まで、広く学ぶべきとする。このような行為はすべて朱子学についての理解を深めるために行うとする。それゆえに、たとえ朱子学以外を学んでも、影響を受けるものではない。

翠軒は、批判される徂徠学・仁齋学を学ぶことは朱子学への理解を深めるためのものとする。そうでありつつも、朱子学以外を認めないとするのではなく、各学問のすぐれた点については学ぶべきという姿勢を示す。朱子学を軸としながら折衷学的な側面がここで窺える。

次に翠軒の学問を彼の周辺がどう理解していたかをみていく。まず、弟子の一人である小宮山楓軒は、師が頻繁に徂徠を物子と敬して記していることに対して、「而今稱物子者、特推先輩之意耳。而して今、物子と稱するは、特だ先輩を推すの意なるのみ。」（操觚餘言）と、ただ、先学に対して敬意を示しただけで深い意義はないとする。

一方、同じく弟子であった青山延子は、次のように述べている。

時田江南來客水府。開社講授。先生又從之游。先是水府學者率主宋学。至是江南首唱古学。而先生之徒左右之。（文苑遺談続集）

時に田江南、來りて水府に客たり。社を開きて講授す。先生も又た之に従ひて遊ぶ。是より先、水府の學者、率ね宋学を主とす。是に至り江南首めて古学を唱ふ。而して先生の徒、之に左右す。

田中江南が水戸で古学を講義し、学風が朱子学から一変したとする。江南の

門下には翠軒も加わっており影響を受けた。また、延于は、「先生初以好古學、不爲時論所容。先生初め古學を好むを以て、時論の容るる所爲らず。」(同上)と、師が不遇を託したのは、古学を学んだためと言及している。

楓軒と延于はともに翠軒の高弟であるも、師の学問についての認識については明確な違いがあった。楓軒は古学の影響を限定的に捉えるが、延于は師の徂徠学への傾斜を認める。

つまり、弟子達の間でも彼の学問に古学が与えた影響について議論があり、そのことから翠軒を徂徠学派に連なる儒者と位置づけられないことが確認できる。

翠軒の学問についてまとめるに、その学問遍歴から、従来、徂徠学派とみられてきた。確かに翠軒が田中江南や大内熊耳に学んだ点や、「六経」を重視するといった点、徂徠を物子と敬して記すところから、古学への傾斜、つまり好意的に理解していたことは明らかである。

他方、翠軒を徂徠学派と位置付けることはできない。自身が学問の目的を「修身齊家」にしていることに加えて、自ら古学派のように朱子学批判を行ったことはないと述べている。つまり、徂徠学・仁齋学に理解を示し、その優れていることは認めるも、朱子学を廃して、古学のみを学ぶべきとはしない。また、学派によらず長所を取るべきという考えからも、折衷学的学問姿勢が読み取れる。

三 幽谷との関係の断絶と学問の継承

幽谷が彰考館に入ったのは天明8年(1788)に師、翠軒の推挙によるものであった。幽谷が正式な館員になるのは寛政元年(1789)で、彰考館編修となり、『大日本史』編纂に関わることになったのは寛政3年(1792)からである。翠軒と幽谷の師弟の断絶の契機となるのが『大日本史』編纂における三

大議とよばれる論争である。

三大議とは、志表の削除、題名更改、論贊の削除で、すべて翠軒が総裁時に起きた問題である。師弟の対立には、編纂事業が藩財政を圧迫していたこと、更に、二代藩主光圀の百回忌までの完成を藩が求めてきたという背景が挙げられる。ゆえに、藩の意向を汲んだ翠軒は『大日本史』の完成を急ぎ、かつ史館の縮小を試みていた。

三大議のうち幽谷との関係が断絶する直接の要因が題名更改である。このことについて幽谷の弟子豊田天功が「一体両流の異同、人々存じ知ル如ク、国史名号ノ議論ヨリ起リ候事ニテ」（中興新書）と述べている。

具体的には、『大日本史』という題名に幽谷が次の四点から反対したことが発端である。一「蓋し天朝、号を建てて「日本」と曰ふを聞く、未だその「大日本」と曰ふを聞かざるなり。」（校正局諸学士に与ふるの書）、二「今、天子の命あるにあらず、私に国史を作りて、命ずるに「日本」を以てするは、豈に体を得たりとなさんや。」、三「ただ我が天朝のみは、開闢以来、一姓相承け、天日之嗣、これを無窮に伝ふ。史を修し事を記すに、なんぞ必ずしも「日本」と云はんや。」、四「義公の意は、紀・伝・志・表のことごとく成るを嫉ち、然る後にこれを天闕に奏し、その名を請はんと欲し、未だ果たさずして薨ず。正徳中に逮び、書成り、衆議して以為らく「時勢に不可なるところあり」と、遂に命じて「大日本史」と曰ふ。」というのが根拠である。幽谷の反対する理由は、第一にこれまで「大日本」が国号として用いたことはなかった。次に、朝廷編纂の史書ではないのに、勝手に国号である「日本」を用いるべきではないこと。第三に、中国の王朝と異なり易姓革命のない日本において史書にわざわざ国号を入れる必要はないこと。最後に『大日本史』の名は編纂をはじめた光圀の意に背くものとする。これらの理由のから、幽谷は、「諸学士、亮察熟慮し、これを総裁に白し、議を君相の間に建て、子大の「史稿」の説を採用させらるれば、幸甚なり。」（同上）とした。

つまり、幽谷は、水戸藩内のみならず、藩外にも知れ渡った『大日本史』の題名を変えようとしたのみならず、彰考館の校正局諸学士、紀伝の編纂を行っていた館員を議論に加え、その賛同を得て、総裁たる翠軒に提出し、議論を藩主や家老に決しようとしたのである。

この論争を考える上で重要なのは、幽谷がいかなる理由でこの書名に反対したかということよりも、すでに水戸藩内のみならず藩外にも知れ渡った名称をわざわざ更改しようとした点である。この行為は彰考館で蓄積された先人の業績の否定で、その中には翠軒も当然含まれていた。

加えて、問題提起も穏当ではなく、幽谷からすれば同僚であり、翠軒からすれば配下にあたる館員までも議論に加え、藩主や家老などより上位者の館外に決定権を委ねたことである。

翠軒はこの行為について、具体的な反論を行ってはいない。ただ問題が解決しない中で、幽谷は藩政改革を求める丁巳封事の上書を行い、その内容が藩主の怒りに触れ、館員の職を免ぜられる。その際に、幽谷と絶縁している。このことから、翠軒はこの題名更改に反対であり、弟子の行為に対する憤りが窺える。これ以降、両者の関係は和解することではなく、立原派、藤田派の対立へと繋がった(14)とされる。つまり、ここにおいて翠軒、幽谷の師弟関係は断絶したのである。

しかしながら、彼等の師弟関係を断絶に追いやった『大日本史』編纂を巡る問題は、結果的には幽谷の意見が採られ、翠軒は彰考館を去らざるをえないことになる。幽谷が師である翠軒との関係を犠牲にしてまでこだわった『大日本史』の題名更改問題は、朝廷から勅許を得て『大日本史』を得たことで収拾する。幽谷は、この争論に対して蒸し返すことはなかった。そのため、この件の本質は学問上の議論というよりも彰考館内の主導権争いであり、根幹には師弟の個人的確執と考えることができる。

翠軒と幽谷の断絶は、学問的な対立というより、両者の関係が不和となる

中で生まれたものであった。ここでは、幽谷の学問観について確認し、その思想が師の考えを継承し発展させたものであることを究明する。

幽谷は、「學者之先務、六經是也。學者の先務は、六經是れなり。」とあり、学問の中で最も重視するものを「六經」とし、その上で重要性について以下に述べている。

夫六經猶繩墨也。諸子百家猶衆材也。雖公輸子之巧、不用繩墨、而欲正其曲直。不可得也已。傳曰、物有本末、事有終始。知先後所、則近於道矣。六經本也。諸子百家末也。(與小宮山君)

夫れ六經は猶ほ繩墨のごときなり。諸子百家は猶ほ衆材のごときなり。公輸子の巧と雖も、繩墨を用ひず、而して其の曲直を正さんと欲す。得べからざるなり。傳に曰ふ、物に本末あり、事に終始あり。先後する所を知らば、則ち道に近し。六經は本なり。諸子百家は末なり。

幽谷は六經を繩墨、諸子百家は衆材とし、公輸子の技巧をしても繩墨を用いなければ、曲直を正すことはできないと説く。ゆえに、学問では衆材で末の諸子百家を学んだとしても、繩墨であり本の六經を学ばなかったならば、意味をなさないのである。幽谷が六經を重視した点から考えるに、朱子学よりも古学に傾斜していることが分かる。

では、幽谷は具体的に先儒の学問をいかに位置づけたのか。彼は諸学派を次のように評している。

昔在我邦、慶長・元和之間、惺窩・羅山二先生出。而人人稍知有學。元祿・正徳之間、仁齋・徂徠二先生出。而人人稍知有古學。當時諸先生、用力經藝、可以概見也。今之學者、或以文辭為業、或以博洽為學。曼衍以窮年、若用力於經藝者、厪厪乎無幾。於是乎。聖人之道、若有、若無。而惺窩・羅山、興學之勤、仁齋・徂徠、復古之功、幾乎息矣。是不佞所以痛心也。(同上)

昔、我邦に在りては、慶長・元和の間、惺窩・羅山二先生出づ。而して

人人稍學有るを知る。元祿・正徳の間、仁齋・徂徠二先生出づ。而して人人稍古學有るを知る。當時諸先生、力を經藝に用ふること、以て概見すべきなり。今の學者、或ひは文辞を以て業と為し、或ひは博洽を以て學と為す。曼衍し以て年を窮むるに、力を經藝に用ふる者のごときは、厘厘として幾も無し。是に於いてか。聖人の道は、あるがごとく、なきがごとし。而して惺窩・羅山、興學の勤、仁齋・徂徠、復古の功、息むに幾し。是れ不佞の心を痛むる所以なり。

幽谷は先学を挙げて今の儒者を批判している。先儒と異なり昨今は、文辞や博洽のみで、重んじるべき經藝に力を尽す者はいない。そこから分かるのは、幽谷にとって学問の意義は「經藝」で、儒学の教えをいかにして政治に活かすかということである。

従来の儒者を評し、朱子学派の藤原惺窩、林羅山は「興學之勤」とし、古学派の伊藤仁齋、荻生徂徠は「復古之功」ありとする。ただ、仁齋・徂徠は同じ古学派ではあるも、徂徠学派が仁齋を批判の対象としたため、この学派に連なる者であれば、幽谷のように仁齋を同列に論じるようなことはしない。つまり、古学派についての理解は師である翠軒を継承していることが明らかである。

更に、幽谷は朱子学が重んじた理について論じている。「聖人窮理以明道。後儒窮理以亂道。是豈理之罪也哉。用之者之罪也。聖人、理を窮め以て道を明らかにす。後儒、理を窮め以て道を亂る。是れ豈に理の罪ならんや。」(同上)とあるように、朱子の後学を批判するも、理の概念自体を否定はしない。

幽谷の折衷学的な学問姿勢が窺えるのが、「今之學者、守一家之言、於其異乎己者、則辨争斷斷如也。可謂自小者已矣。今の學者、一家の言を守り、其の己と異なる者に於いては、則ち辨争すること斷斷如たるなり。自ら小なる者と謂ふべきのみ。」(答木村子虚)である。今の學者は、一つの学説に執着し、自らの信奉する学説と異なると論争することに固執することを批判する

点からも見て取れる。幽谷の諸学に対する学問の位置づけからも師の翠軒を継承していることが分かる。

学問理解について翠軒・幽谷に大きな差異は存在せず、継承されていることが確認できた。一方で、両者には学問の目的について明確な違いがある。翠軒は「修身齊家」であり、幽谷は「経藝」であった。ここからも、両者の対立が、学問内容についての争論というよりも、政治進出を目指す弟子とそれをよしとしない師の軋轢が読み取れる。

四 おわりに

後期水戸学における翠軒の果たした役割を検討する上で、翠軒の学問について、また幽谷との関係から継承と断絶をみてきた。

翠軒は「六経」を最重視し、学問の目的を「修身齊家」に置き、学問姿勢は折衷学的なものであった。幽谷もまた、師と同じく「六経」を学問の基軸とし、古学派を尊重しつつも朱子学についても敬し、一つの学派に固執しないものであった。両者の異なる点をあげるならば、学問の目的を、翠軒は「修身齊家」とし、幽谷は「経藝」とする。

ただ、翠軒の事績から見た場合、翠軒が学問を『大日本史』編纂や、自己修養のみに限定したとは考えられない。さらに、彰考館も翠軒が総裁になる以前と以後では朱子学の位置づけ自体異なっており、この点も考慮に入れる必要がある。なにより、翠軒自身が水戸藩政に積極的に参画しており、その上、藩主を通じて幕政にも影響を与えていた。この事実からも、翠軒が学問に関して政治実践を重んじていたと推察できるのである。

つまり、翠軒と幽谷の学問上には大きな対立点はなく、幽谷は師の学問を継承していたということが出来る。ゆえに、関係の断絶に至った『大日本史』編纂の問題もまた、学問的な論争というより、両者の立場からの政治対立や

性向という個人的な軌轍が原因と考えるべきである。

以上から、後期水戸学における翠軒の定位を考えると、これまでの研究で位置付けられた翠軒像(15)とは異なる面が見えてくる。つまり、翠軒は朱子学中心であった彰考館において仁齋学、徂徠学といった古学を受容しながらも、後期水戸学の基調となる折衷学的な学問姿勢を構築した面である。

加えて、史実として翠軒は『大日本史』編纂に限定されていた彰考館総裁の役割を拡大し、藩政や幕政に介入するまでに至ったのである。翠軒以降、彰考館の館員が藩政に参画するようになる。

後期水戸学を、「経世」の学であり、実務者の育成とした場合、『大日本史』編纂の史論を中心とした前期水戸学からの転換は、まさに翠軒から始まったと言える。この点から考えるに、翠軒こそ後期水戸学の学問的性格や方向性といった端緒を形成した人物として捉え直すことが可能になる。

これは、従来、藤田幽谷学派としての後期水戸学の再検討、ならびに水戸藩内の党争においても、立原派、藤田派といった党派によるものや、尊王、敬幕という思想対立によるとした理解に対し、新たな問題を提起するものといえよう。

注

本稿で引用した「答菊池平八」、「与鈴木総裁書」、「擬策問二道」は『此君堂文集』(立原善重 1955年)、『操觚餘言』は国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2537919> (立原翠軒著小宮山楓軒写 1824年)、『文苑遺談続集』は関儀一郎編『日本儒林叢書』(東洋図書刊行会 1927年)、『中興新書』、『校正局諸学士に与ふるの書』、今井宇三郎等編『水戸学』(岩波書店 1973年)、「與小宮山君」、「答木村子虚」、菊池謙次郎編『幽谷全集』(吉田彌平 1935年)を底本とした。

(1) 本山幸彦著「後期水戸学の人々」(『江戸の思想家たち(下)』研究出版社 1979

年を参照。

(2) 本山幸彦著「後期水戸学の人々」(『江戸の思想家たち(下)』研究出版社 1979年)を参照。

(3) 後期水戸学について、大月明氏は「藤田幽谷研究ノート」(『近世日本の儒学と洋学』思文閣 1986年)で「幽谷・東湖・会沢正志齋らによって、前期の伝統の上に立ち、外憂内患の政治・社会についても激しい主張と行動を展開」とし、尾藤正英氏は「水戸学の特質」(『水戸学』岩波書店 1973年)で「水戸学の立場を建設した藤田幽谷・東湖父子や会沢正志齋らの学者」に関して、後期水戸学の形成においては、藤田幽谷、東湖、会沢正志齋が代表的人物としている。その上で、水戸学における翠軒の位置づけについて、橋川文三氏は、「水戸学の源流と成立」(『藤田東湖』中央公論社 1974年)で「翠軒の著述は現在(私には)見るのが困難であり、第一彼はいわゆる水戸学の立場からは冷淡にしか取り扱われていない」とし、吉田俊純氏は『寛政期水戸学の研究 翠軒から幽谷へ』(吉川弘文館 2011年)で、「水戸学の始祖は幽谷とされる。このとらえ方は、幕末の激しい党争にまで至る立原・藤田の学派の分裂のために、師翠軒を意図的に排除した藤田派のとらえ方であるが、思想的営為を始めたという意味では誤りではない。」としている。

(4) 水戸藩における徂徠学の伝播については、『水戸市史』(水戸市役所 1982年)では「谷田部東壑、立原翠軒らがその門に学んだほか、その新奇の学説を喜んで、従学する者が藩士の中から多く現われ、水戸の学風はここにおいて一変したといわれる。」とし、吉田俊純氏が『寛政期水戸学の研究 翠軒から幽谷へ』で、「学問的には立原翠軒が徂徠学を導入したことに始まる」としている。

(5) 立原翠軒の事績については、伊東多三郎編著『水戸市史』(水戸市役所一九八二年)、荷見守文「此君堂立原翠軒」(『藝林』八号 1957年)を参照。

(6) 谷田部東壑(1733~1789)、名は常德、字を子朴、江戸時代中期の儒者で、水戸藩士。医術を吉益東洞に学ぶ。著に『東壑筆記』がある。

(7) 田中江南(1728~1780)は、江戸時代中期の儒学者。常陸土浦藩医の出で、古

文辞学派の大内熊耳に学び、水戸に私塾を開いた。著に『六朝詩選俗訓』がある。

(8) 大内熊耳(1697~1776)、江戸時代中期の儒者で、名は承裕、字を子綽、熊耳と号す。徂徠の高弟で、のちに唐津藩儒となる。著に『家世遺聞』、『熊耳文集』がある。

(9) 細井平洲(1728~1801)は、江戸時代中期の儒者、名は徳民、字は世馨。米沢藩主上杉鷹山に招かれ藩校興讓館で教え、のち尾張藩に侍講として仕えた。著に『嚶鳴館遺稿』、『詩経古伝』がある。

(10) 『後漢書』黨錮伝に「至有石渠分争之論、黨同伐異之説、守文之徒、盛於時矣。」とある。

(11) 『漢書』竇田灌韓伝に「及竇嬰失勢、亦欲倚夫引繩排根生平慕之後棄者。」とある。

(12) 『列子』説符に「人有亡鉄者、意其鄰之子。視其行歩、竊鉄也。顔色、竊鉄也。言語、竊鉄也。作動態度、无為而不竊鉄也。」とあり、疑ってみれば言動がすべて怪しく見える譬え。

(13) 『禮記』曲禮上に「毋剿説、毋雷同。」とある。

(14) 翠軒の幽谷の対立については、様々な要因が検討されており、瀬谷義彦氏は「水戸藩朋党の成立過程(下)」(『茨城県史研究』2 1975年)で「『大日本史』編さんの過程で起こった立原・藤田両派の分裂は、単なる感情の対立からではなく、幽谷の学問的成長に伴って大きくなっていった翠軒との乖離、両者の現状認識に対する相違などに裏付けられ、特に藤田派の文化年代の政治的進出を契機に、朋党的対立に向かったもの」とし、対立の要因を、翠軒と幽谷の個人的な確執ではなく、幽谷の学問の発展、現状認識の相違によるもので、藤田派の政治進出が断絶を決定的なものとしている。一方で、学問的対立ではなく政治的対立に求めるのが、橋川文三氏の「水戸学の源流と成立」(『藤田東湖』中央公論社1974年)で「問題の所在が学問というより藩政上の人的勢力の問題」とし、野田武彦氏は、「どこまでも学者肌の人物であった翠軒は、政治的策謀にかけては幽谷の敵ではなかった。」(『江戸の歴史家歴史とい

う名の毒』筑摩書房 1979 年) とある。

(15) 翠軒の評価については、『水戸市史』(水戸市役所一九八二年) では、「水戸藩の文教は、翠軒の出現によってその水準を高め、中央の学界と肩を並べると共に、やがて後期に独自の水戸学が発展するための基礎がここに形づくられた」とし、高く評価するものの、後期水戸学の学者というより、後期水戸学が生まれる環境を整えた人物としている。吉田俊純氏は『寛政期水戸学の研究翠軒から幽谷へ』(吉川弘文館 2011 年) で「翠軒は論理的に思考する学者でなかったこと、十分な史料批判のできる歴史家でなかったことを意味している」とし、「翠軒は詩文・書画・古物に優れた人であった。我々の眼からすれば、翠軒は学者というよりは、文人であった。」としている。翠軒に対する評価については様々であるが、後期水戸学者として位置づけるものではない。

(たけいし・ともりのり 筑波大学人文社会科学研究所一貫制博士
哲学・思想専攻)